学 術 調 査 報 告 書

2008 年 04 月 30 日

（フリガナ）	サイジラホ	入学年度	2003 年度
申請者名	財吉拉胡	学年	D3

研究題目	内モンゴルのシャマニズムにおける医療文化に関する研究
主任指導教員	二木　博史

(1) 学術調査の目的

内モンゴルの多元的医療体系においてシャマニズム的治療行為は人々の健康観念に深いかかわりがある。こういった医療文化を、これまで、シャマニズム的ないし伝統医療史的視野に入れた研究が数多くおこなわれている。ところが、シャマニズムと民俗医療の関連性を考察した例が見られない。私はシャマニズム的医療を内モンゴルの多元的医療体系の中で位置づける試みをおこなっているとともに、シャマニズム研究の中でその医療的職能を検討することを目的にしている。

本研究の具体的な対象は二つに分けられる。一つは、シャマニズム的精神治療である。原因が不明であるといわれる身体不調に伴った精神異常はシャマンの「診断」によって明らかになり、次第に治療儀礼がおこなわれる。つまり、依頼者が患っている病気は「巫病」（シャマンになる病い）であるか、あるいはシャマニズム的定義による精神病であるかを明確にする。その因果関係は「祖霊」（シャマニズム的枠組み中では、なくなったシャマンの霊が人間世界で生きている子孫に憑くと信じられている。その霊が祖霊と呼ばれている）あるいは「精霊」（祖霊以外の霊）が人間にとり憑いたものであり、前者は治療儀礼により依頼者が祖霊を受け入れ、次第にシャマンになることであるが、後者はそれにより「精霊」を追い払い、正常者になるという理屈に基づいている。もう一つの研究対象は、シャマニズム的整骨治療である。整骨治療そのものは物理的に骨折や脱臼をつなぐ手の技であるが、シャマニズム的枠組みの中では治療者が心霊的パワーを持っており、世襲的、超自然的存在として地域社会の人々に信じられている。整骨者はトランスに入らないがシャマンと同じく祖霊や精霊を信仰していることが興味深い。

本研究はこういった医療と宗教の境界線に立つ学際的分野を視野に入れながら、内モンゴルにおける民俗医療を考察する目的を持つ。また、医療の多元論と医療人類学的アプローチから内モンゴルにおけるシャマニズム的医療を研究することは私の博士論文のテーマでもある。このために、2001 年から断続的にフィールドワークをおこなってきた。現時点では、調査で得たデータの整理と分析をしながら博士論文を作成しているが、その過程で更に調査を深めたい内容がいくつか出てきた。現地に再び行き追加調査をおこなうことが今回の学術調査の目的であった。

以下は博士論文の目次である。

序　章　医療人類学と内モンゴルにおける民俗医療

第一章　内モンゴルにおけるシャマニズムと医療文化

第二章　シャマニズムと精神治療

第三章　アンダイ儀礼 - シャマニズム的精神治療の過去

第四章　シャマニズムにおける成巫過程と精神治療

第五章　医療の多元論とヤス･バリャーチ（「整骨者」）

第六章　ホルチン地方のシャマンとヤス・バリャーチの事例考察

第七章　フルンボイル地方のシャマンとヤス・バリャーチの事例考察

終　章　結論と今後の課題

(2) 調査実施地および期間

調査実施地：

一、中国内モンゴル自治区通遼市ホルチン左翼中旗ヨリーンモド村

二、中国内モンゴル自治区通遼市内モンゴル民族大学

三、中国北京国家図書館

四、中国北京中央民族大学図書館

調査期間：

2008 年 3 月 5 日－2008 年 3 月 14 日

(3) 学術調査の具体的な実施内容

調査は儀礼考察、人物インタビュー、資料調査などを通じておこなわれた。

一、儀礼考察

儀礼調査は 2001 年から開始しているが、今回の追加調査は 2008 年 3 月 6 日から 9 日にかけて、通遼市ホルチン左翼中旗ヨリーンモド村で実施した。以下は成巫儀礼の事例考察である。

成巫儀礼は成巫過程の一部であり、巫病治療そのものでもある。つまり、それは治療儀礼である。私のフィールドワークの対象になった内モンゴル東部地方のシャマニズムにおける巫病治療はシャマニズム的修行としておこなわれるのが普通である。ホルチン地方では、この数十年の間でシャマンの数が増えつつある。たとえば、ホルチン・ジューン・ガローン・ドンダド・ホショー(ホルチン左翼中旗)に在住する T シャマンによると、確実な統計はないが、彼女は大体 80 人以上の弟子を育てているという。2004 年、2005 年と 2006 年夏休みおよび 2008 年春休みを利用して彼女を訪問し、シャマニズム的活動を観察したところ、毎晩十人近くの弟子シャマンが集まって修行をおこなっていた。かれらの修行は集団的巫病治療だけではなく、依頼者の自己治療のプロセスでもある。ここで師匠シャマンの診断と治療の両面からなる治療儀礼を取り上げる。

治療者シャマンはトランス状態に入り、依頼者を診断し、祖霊の教えを基に治療儀礼をおこなう。ここで観察したいくつかの事例を統合して記述しておきたい。説明しておきたいのはいずれの儀礼にしても、行事は星が見える夜に実行される。このような事例をおこなう前提には、依頼者は長時間の心身不調に罹り公的病院で診療してもらっても効果がなかったことがある。苦しみの中で家族や親戚の勧めで、この地域の有名なシャマンや僧侶へ相談しにゆき、診断してもらう。

僧侶に診てもらう場合、依頼者は基本的に呪文や護符をもらって自宅へ戻り、それらを燃やした灰を「薬」として服用する。あるいは、依頼者はもらった護符をお見守りとして身に付ける。ところが、シャマンに診てもらうと、シャマンは以下のような診療儀礼をおこなう。

まずは準備段階である。治療者シャマンは三種類の飲み物＝お茶、牛乳、お酒を一杯ずつ(えくぼ)加えて仏壇の前においておく。そして、治療者がもう一杯のお酒を取って、外へ出て、光る星が見える青空へ注ぐ。これは治療者シャマンの自分の祖霊が人間世界へ降臨してくるように招いた最初の象徴的交流であろう。しばらく待っているうちに治療者が戻り、左手に太鼓を、右手に叩き棒を持ちながら(あるいは合掌しながら口の中で軽く歌う形をとることもある)、家屋の玄関に向かってたつ。そうするのは、降臨してくる祖霊がドアのすきまから入ってくるのを迎えるためであると説明されている。

第二は祖霊を誘う段階である。この段階では、最初に治療者シャマンが集団の真ん中に合掌して立ったまま(あるいは太鼓を叩いたまま)祖霊の憑依してくるのを祈祷して待つ。治療者シャマンの隣に立っている助手と一人の弟子が太鼓を敲きながら神歌を歌い始める。参加したシャマンたち皆で盛り上がって歌う。唱文の一段落を転写しておきたい。

Bandang sirege kürtele,
Baγča köji jula-ban egüsgen-e;
Baγ-a boluγsan nilq-a-nuγud-čini jalbarin-a,
Baγaturčud-i jalaju boi.

この歌詞は守護霊や祖霊を招く唱文の最初の段落であるが、繰り返し歌われ、治療者シャマンの祖霊が憑依するまで続く。その意味は、「椅子や机[1]までが/ 線香と仏灯[2]に火をつけたぞ/ 幼い子供たち[3]が祈祷しているぞ/ 英雄のあなた達[4]を招き迎えているぞ」である。このような内容が繰り返されると、祈り立っているシャマンの体が震え始める。

この段階では、祖霊が憑依するとシャマンが身体を震わせながら踊り始める。参加者の皆が以下のように歌う。

Bang-bangdi[5] γajar-i,
Bangtu[6] γartal-a debsey-e;
Baγ-a yeke-yin uritai,
Baγatur tan-ayan urin jalagsan yum.
Alda alda-bar alquy-a,
Alaγ debel-ün qormui-yi degdegey-e;
Debkes debkes debkeljey-e,

---

[1] 線香や仏灯を置いておく仏壇や机をさしている。内モンゴルのシャマニズムでは、祖霊祭祀や治療儀礼をおこなうときに、治療者シャマンや弟子シャマン、あるいは依頼者の祖霊にささげるために線香と仏灯に火をつけ、お茶、お酒、牛乳を三つの杯に満杯入れて、その前に捧げておく必要がある。こうするのは人間世界へ降臨する祖霊を喜ばせるためのしきたりであるといわれている。
[2] 現代モンゴル語で線香は köji と言われ、仏灯は jula と呼ばれる。
[3] 治療者シャマンとその弟子たちの集団を含めた人間世界の人々をさしている。
[4] 人間世界へ降臨してくる祖霊をさしている。
[5] Bang bang-di は中国語の「棒 bang」(丈夫)に由来するホルチン地域のモンゴル語方言である。
[6] Bangtu は中国語の「棒头 bang tou」に由来するホルチン地域のモンゴル語方言である。

Debel-ün-eyen qormui-yi degdegečigey-e.

これは憑依状態になり始めたシャマンがもっとも興奮して踊るための唱文である。その意味は、「丈夫な地面を/硬くなるまで踏もう/ 老少のみなの前で/ 英雄のあなたを誘っている/。 大きく、大きく、歩こう/ アラッグ服[7]の裾を飛ばせよう/ デブケス、デブケス[8]、跳ぼう/ 服の裾を飛ばせよう」である。

こういった状態がしばらく続くと、シャマンが完全に憑霊状態になり、シャマンの踊りは一種の熟練状態に入り動作がきれいに見える。この時に家屋の奥にあるオンドルの真ん中で事前に用意してあった座布団へシャマンあるいは確実にいえばシャマンに憑依した祖霊が降臨して座るように誘うのである。そのための唱文は以下のとおりである。

Dörben döngse-tei[9] qanju-la bain-a, köi,

Delgeged talbiγsan taiji-yin olbuγ-tai,

Debel malaγai-tai nilq-a-daγan singgerejü yiregsen,

Dörben döngse-tei qanjun deger-e-ben jalaraju saγuqu ügei-yü-de.

この唱文の意味は、「四つの煙道があるオンドルの真ん中に/ 敷いておいたタイジ[10]の座布団だぞ/ 帽子と衣服をつけた幼い子供にしみ込んで降臨してきた天神や/ 四つの煙道があるオンドルに腰掛になってくだされ」であり、参加者の皆はこれとおなじ意味の神歌を繰り返し歌って、憑依したシャマンがオンドルの上に座るまで続く。

合唱に誘われ、シャマンが最後に用意してあった座席に逆時計回りで回り、座布団に飛び回ってぴったり座る。そこからは霊界と人間世界との交流、依頼者への診断などが始まる。治療者シャマンのこの技法はモンゴル語のシャマニズム的用語では saγudal-daγan saγuqu（「座席に座る」）[11]と呼ばれる。

---

[7] Alaγ debel はシャマンが着る法服を指すモンゴルのシャマニズム的用語である。特にホルチン地域のシャマンは多種の色と花の絵などが付けられている生地の布を使って法服を作るのであった、それをアラック服というのである。

[8] Debkes debkes というのは舞踊の動作と様子を指しているモンゴル語であり、踊りや走りの様子が飛んでいるような形であることを描いた副詞である。

[9] Döngse はオンドルの煙道を意味するホルチン地域のモンゴル語方言である。

[10] Taiji はチンギス・ハーンの家系出身の貴族をさす。

[11] Saγudal-daγan saγuqu（「座席に座る」）とはトランス状態に入ったシャマンが必ずおこなう身体的技法である。弟子シャマンが踊りと憑霊などの技を身に付けることと、完璧に憑霊状態になるために用意した座席へ必ず座ることが、ャマニズム的修行の中で要求されている。もし、依頼者や弟子シャマンが

第三段階は祖霊と人間世界との交流、依頼者を診療するという二つの内容によって完成される。このプロセスでは最初に参加者の皆や依頼者が憑依して胡坐しているシャマンへ跪いて祖霊の教えを祈りながら傾聴する。このとき、憑依したシャマンは祖霊と人間の間の霊媒者との両役を演じる。その対話を治療者シャマンの夫や妻などの側近が解釈することになる。ホルチン地方の T シャマンの場合、彼女の夫が人間世界の子孫たちと弟子たちを代表して祖霊へ挨拶する。挨拶はあまりにも詩的であったが、ここで大体の意味を訳しておく。

「天神の木が生えたぞ/　聖なる宮殿は平和であるのでしょうか/　天神の木の枝が元気で伸びているよ、天神様/。幼い子孫へ憑依してきたよね、天神様/　お体がお疲れでしょうか、天神様」。

そうして、お酒を捧げると、治療者シャマンがその酒盃のお酒を右手で取り、一口吸って、皆に向けて吹き付ける。そして、右手でひざまずいている信徒や子孫たちに起き上がるようにと合図をする。人間世界で暮らしている子孫たちとの交流は隣で解釈をする者にさえ聞き取りにくいので、ここではその会話を省略する。

こういった一連の交流が終わったとき、依頼者が憑依しているシャマンの前に来て自分の症状を訴える。あるいは、心身不調でオンドルの上で横になっているとき、治療者シャマンはその症状と病歴を明確に語る。たとえば、2006 年の調査例では、当時、巫病に罹っていた T.G 氏はシャマンの診断を受けたときに病気があまりにもひどくて、身体が動けない状態にあったため、オンドルで横になって診断を受けたという。

憑依中の治療者シャマンは依頼者のすべての症状と過去を説明し、体にとり憑いているのは祖霊であるのか、あるいは精霊であるのかを診断することは内モンゴルのシャマニズム的治療儀礼において普遍的であった。祖霊によって依頼者が巫病にかかっていることが判明した場合、治療者シャマンの祖霊が何時に治療儀礼をおこなうべきであるかをはっきり教えてくれる。

最後は祖霊や守護霊、および諸霊を見送る段階である。治療者シャマンの助手や弟子が太鼓を叩き、銅鑼を鳴らし、治療者シャマンの祖霊を送り出す。私の調査では、神歌を歌わずに叩いている太鼓の音のリズムにしたがい、座っていたシャマンがオンドルから降り

用意してある座布団にぴったり座ることができれば、シャマン集団への入会を象徴できる行為として認められる。そうでなければ、祖霊が完全に憑依してくれないし、祖霊と人間世界との間の交流もありえないといわれている。ゆえに、saγudal-daγan saγuqu（「座席に座る」）ことはシャマニズム的修行の中で非常に重要な身体技法であり、シャマニズムへ入会したことを象徴する一つの要素であると見られる。

て玄関を突き抜け敷居の真上へ背中を伸ばしたまま倒れこむ。そのとき、二人の助手が倒れこむシャマンの両サイドから受け取る。これは祖霊が霊界へ戻ったことの象徴であり、シャマンが正常状態に戻ってくることの象徴でもある。しかし、神歌を歌って祖霊を見送ることもあるという。たとえば、マンサンは、守護霊を見送る唱文を以下のように記録している[12]。

Ebüge degeds-ün sitügen,
Orun bairi-dayan jalara-a;
Erdemten baysi-yin sülde,
Über-ün sirege-degen bairila-a.
Ayula ayula-yin ejed,
Uy-un orun-dayan yabu-a;
Usu müren-ü qaiyul-ud,
Ergijü bučayad yabu-a.

こういった神歌は内モンゴルのホルチン地方のシャマニズムの中で祖霊を見送るためにしばしば見られる唱文のようである。その大体の意味は「祖霊よ/　自分の居場所へ戻ってくれ/。 山水の主よ/ 自分の所へ帰ってくれ」ということである。この段階はシャマニズム的儀礼の中で、祖霊を誘うことと同じく重要性を持っている。見送りの神歌とメロディー、太鼓のリズムなどがなければ、祖霊や諸守護霊はなかなか戻ることができず、憑霊状態にいるシャマンの身体ももっとも苦しくなるといわれる。ここで強調したいのは、玄関と敷居はシャマンが憑依するときの重要な位置になっており、祖霊がその玄関の空いているところを利用して出入りをすると信じられている。やがて、その玄関と敷居は、シャマニズム的枠組みの中で、人間世界と霊界と間の境界になっているようであろう。

内モンゴル東部地域におけるシャマニズムでは、成巫儀礼は病気治療であり、シャマニズム的修行でもある。巫病は近代医学的には原因不明であり、依頼者は長時間の心身苦痛を経験する。しかし、こういった依頼者はシャマンに診てもらうと、「シャマンになる病気にかかっている」と診断され、依頼者から治療者への長い修行を通過する。前掲の事例のように、私は実際にシャマンになる病気にかかったインフォーマントと多く出会った。か

[12] T.Mansang *Mongyol Böge Mörgül*（『モンゴルシャマニズム』）、内モンゴル人民出版社、1990:211

れらは師匠シャマンの治療を受け、また、師匠の指導を受け、殆ど毎日のように修行をおこない、次第に一人前のシャマンになっていく。つまり、われわれはこういった症例と治療のケースを多元的医療体系のなかで位置づける必要があると考えられる。

二　人物インタビュー

今回インタビューしたのはヨリーンモド村の有名な女性シャマン T 氏である。T シャマン(1954 年生まれ、内モンゴルで女性シャマンはオドガンと呼ばれることが多い)はヨリーンモド鎮(町)の農業を主な職業とする住民である。私は 2004 年 7 月、2005 年 8 月、2006 年 7 月と 2008 年 3 月に四度に渡って T シャマンのシャマニズム的活動を観察し、彼女のシャマンへのプロセスについて尋ねた。以下に彼女の成巫過程を事例として取り上げ、病者から治療者になったルーツ[13]を考察してみたい。

調査に当たった 2008 年時点では彼女は夫と、長女の一家三人と一緒に暮らす五人家族であった。もともとは子供四人であったが、次女が交通事故により四年間の入院生活を送り、後になくなっており、三女は花嫁になり実家におらず、一人の息子は現役軍人であったが、今フフホトで働いているという。彼女は子供のときから medege-aldaraqu(意識を失う、意識不明、気絶など)病に時々罹っていた。17 歳の時には、夢の中で、牛に乗った一人の老人があらわれ、すると突然、気絶したり、痙攣したりしていた。このような状態が結婚するまで続いた。結婚後、このような症状がなくなり、安心していたが、夢を見ることが多くなり、僧侶やシャマンがよく現れていた。彼女が 33 歳のとき、前のような気絶や痙攣のような症状は現れなくなったが、ある種の原因不明の心身不調となり、何度も大都会の病院に行って検査してもらった。結果は五臓六腑に何の病気もなく、いずれも正常であった。最後に、ホルチン地域で非常に大きい病院－通遼市「蒙医学院付属医院(当時の名称)」で(meterel)神経[14]による心臓病(jirüken-ü kei ebedčin)、鬱病であると診断されたという。「シャマンの病いは神経と心臓の病気としてあらわれるのが多い」と T シャマンが語る。

こういった心身苦情の中で、彼女の人生の中で最も重要な出来事が起こる。実は、彼女

---

[13] シャマニズム的枠組みの中で、「患者」が「治療者」になるということは成巫過程の普遍的因果関係であるようだが、モンゴル文化圏の中で、こういった見方を議論したのは島村である。かれはモンゴル・ブリヤート人のシャマニズムの事例研究をおこない、患者になるということが治療者になる必要な条件であると明言している。詳しくは島村一平「「患者」が「治療者」になるということ」『現代のエスプリ』2005(9):52-62 を参照。

[14] モンゴル語の meterel「神経」は西洋医学がさす nerve「神経」より意味合いが広い。

の祖父はシャマンだったのだ。それは実家に帰ったときに、一番上の兄に病気と夢のことを話した結果、「お爺さんはシャマンだったので、病院で診療方法がなければ、シャマンに尋ねて聞いたほうがよい」と兄が教えてくれた。兄弟の中で末っ子だった彼女は祖父に会ったことがなかった上に、祖父がシャマンであったことを誰も教えてくれなかったという。実家から戻ってきた彼女は近所の人々からシャマンのことを聞いた。隣村のシャマンに相談してみたところ、「祖霊(祖先シャマンの霊)がソーダルをほしがっている[15]。シャマンになったほうがいい」といわれ、一週間分のサイック[16]をもらって服用した。祖霊のこととシャマンになることを夫と相談したが、高等学校卒業まで社会主義的教育を受けた夫が、シャマンのことを迷信と信じていたため、祖霊のことも信じずシャマンになることを反対していた。その護符の効き目であるかもしれないが、体調がしばらくよくなり、その老人の夢を見なくなってきた。しかし、三ヶ月間経ったある日から、体調も崩れ、夢の中であの老人が頻繁に現れるようになり、それに伴った思いも寄らぬトラブルがあったり、家畜が病気になったりして、家計が苦しくなってきた。

以上のような心身的苦境を耐えらなくなり、彼女は祖霊を自分から引き離すようにシャマンたちに頼んで施術してもらった。しかし、子供のときの気絶の症状が再び現れ、精神錯乱になり、深夜に何度も飛び出した。家族の人が見つけたところ、野外を歩き回っていて本人は何も気づいてなかったという。また、祖霊が夢の中で頻繁に彼女にシャマンになるよう勧めた。「もし、シャマンになって私を受け入れたら、すべての苦痛と災難がなくなる」と話してくれた。それを拒否した彼女はシャマンに頼んで、祖霊を引き離すように施術されていた。しかし、今度はその祖霊の老人が夢の中で「これ以上の酷いことを起こしてやる」といって姿を消したという。翌日に、次女が下校中交通事故で骨折して入院したのである。これは T シャマンの 34 歳の冬の出来事であった。治療の結果、後遺症として尿失禁になり、事故から四年半後に次女はなくなったという。そのときは、夢を見ることと心身不調が続き、占い師やシャマンに治療を求めていた。

---

[15] Saγudal（「ソーダル」）は「座席」を意味するモンゴル語であるが、内モンゴルのシャマニズム的用語として、「ソーダルをほしがっている」が取り上げられる。それは祖霊が世襲的子孫を見つかって、憑依したがっているというとこを意味する。

[16] Sayig サイック:ホルチン地域のモンゴル語の sayig は呪文付けの護符のことをさしており、便りのような大小不等の紙や布の上にチベット語や中国語、およびモンゴル語で経文を書いたものである。あるいは、シャマンがまさに仏教の開眼供養をするように呪文をつけた布切れをさす。そのサイックを燃やした灰は酒や牛乳、砂糖などを em-ün kölüg（「補助薬」）としてつけて一緒に飲む。「サイックは体に憑いた悪霊を追い出すか、鎮圧する機能を持っている」とホルチンのモンゴル人はよくいうのである。現代モンゴル語で、護符のことは Sakiy-a とも呼ばれることもあるが、サイックと完全に同じ意味を持つ語彙ではないと考えられ、語源的関連性を明確にする必要がある。

そうして、災難に襲われた彼女はまた占い師に診てもらった。そのとき、その占い師が「あなたに sitügen（ここでは祖霊をさす）がついている。あなたの師匠は自分の家より東南方向にいる」と教えてくれた。シャマンになる方法しかないと分かった彼女は、のちに自分の師匠となる隣村の S シャマンに診てもらったところ、「あなたの身体に悪者がついている」と占って、サイックを呪ってくれたが、そのサイックを飲んだ所為か、調子がもっと悪くなってきた。その後、同じ村のもう一人のシャマンの憑依するところを見に行って、自分も憑依し、師匠は S シャマンであることを知ったというのである。最後に、彼女は 41 歳のときに S シャマンに弟子入りし、シャマンになる技法を学んだという。しかし、加入儀礼(修行)の最中に憑霊状態になり、自分の祖霊の生まれた場所、名前、なくなったときの年齢などの系譜をはっきり教えてくれたのはボーリーホワ(Bao-li-hua)という村の C シャマンのところであると T シャマンは強調する。つまり、C シャマンの指導で一人前のシャマンになったということであろう。

巫病になった依頼者は、自分が巫病にかかっていることになかなか気付かない。ゆえに、心身不調になってから、長時間に渡って医者や占い師に診療を求めるのであった。病院や占いに通い、家族の財産をなくした依頼者がいれば、長い間薬やサイックを飲んで、病気が悪化した依頼者もいる。こういった、心身苦情や家族の悩みを経験して、最後にシャマンになるのであった。

三　調査資料

3 月 13 日午前中、北京市中国国家図書館でシャマニズムに関するモンゴル語の資料と中国語の資料を閲覧した。3 月 13 日午後、中央民族大学図書館で 1996 年に王三月氏がモンゴル語で作成した修士論文『ホルチンシャマニズムにおける詩歌研究』を閲覧した。この修士論文は王氏が三年間をかけて内モンゴル東部ジャロード旗でフィールドワークをおこない、シャマニズム的詩歌を蒐集して分析したものである。分析部分は内容が稚拙で、従来の先行研究を超えた内容が見つからなかったが、評価すべきは、中に、当時の資料が記述されていることである。図書館側に複写が許可されなかったため、私は必要な資料を書き写した。それは、私の博士論文に必要な、シャマニズム的枠組みの中で精神治療をおこなうときに使う唱文であった。たとえば、精神治療のときに、シャマンは祖霊が降臨してくることを以下のように詠うのである。

Tümen nidütei tengri ta

Tümen γajar qola baibaču

Tengri-yin tulγaγuri-yi daγaγad

Dergete mini baγuγad yir-e.

Qobuγtai böge-yin šabi bi

Qurmusta tengri-yi jalaju bain-a

Qurw-a yirtinču-yin kömüs-ün esen mendü-yin tölüge
Qadaγ-i bariγad naijam daγau baγuγad yir-e. [17]

この唱文の意味は、「万眼のあるテンゲリ(天神)が/ 万里を離れであっても/　天の柱に沿って/　私の傍に降臨してくれ。/　ホブグタイ[18]シャマンの弟子である私が/　ホルモスタ[19]テンゲリを招いている/ 世の中の人々の平和と健康のために/ ハダク[20]を持ちながらナイジムを沿って降臨してくれ」であり、祖霊や神霊が降りてくるように歌ったりするのである。ここで記録されている「天の柱(tengri-yin tulγaγuri)」と「ナイジム（Naijam）」は、祖霊が霊界から人間世界へ降臨してくるルーツを指しているシャマニズム的用語である。内モンゴルのシャマニズムでは、祖霊はその柱に沿って降臨してきて子孫シャマンへ憑依したり、依頼者の体についた精霊を追い払ったりする機能を持っている。同様に、これらの用語は、私の博士論文の内容の一つである「アンダイ儀礼」の中であらわれた「天の柱」と「ナイジム」と機能的に類似したものである。

(4) 学術調査の結果およびそれに基づく考察など

「儀礼考察」において、シャマニズム的治療儀礼として、依頼者にたいする師匠シャマンの治療は巫病治療と精神病治療（yaγum-a naγaldugsan ebedčin、地元では「ものが憑いた病い」と称す）との二つに分類される。巫病治療は師匠シャマンの治療だけでは完全に治すことができず、依頼者が師匠シャマンの指導でシャマニズム的修行をおこない自ら憑霊状態にならなければならない。つまり、シャマニズム的修行そのものが病気治療なの

[17] 王三月 *Qorčin böge-yin iraγu nairaγ-un tuqai sinjilegen*(『ホルチンシャマニズムにおける詩歌研究』)、中国中央民族大学修士学位論文、1996:49-53

[18] ホブグタイシャマンはホルチンシャマニズムの創始者であり、ホルチンシャマンの祖先であると信じられている。

[19] ホルモスタテンゲリとは三十三天神の主(ペルシャ語で Ahura Mazda)を指している。

[20] Qadaγ ハダクとはチベット人、モンゴル人が神仏または珍客に尊敬の徴として献ずる薄絹を指し、黄、白、藍などの色のものがあり、長さ 1.5 メートルから 3 メートル余りに及ぶ。

である。後者は精神病にたいする治療儀礼であり、依頼者に憑いた悪いものを追い払う儀式である。今回の追加調査では、主に巫病治療と成巫過程に注目した。

「人物インタビュー」部分では、シャマンの成巫過程について記述した。要するに、成巫過程そのものはシャマニズム的枠組みの中での病気治療のプロセスであった。

内モンゴル東部ホルチン地方ではシャマニズム的治療が依然としておこなわれている。しかし、今度の追加調査から分かるように、数年まえの調査と比較するとシャマニズムは復活しつつあるが、その儀礼過程が簡略化しており、内モンゴルホルチン地域のシャマニズム的伝統を失いつつあるのが明らかであった。

最後に、本報告書の内容は私の博士論文の第四章の一部分であることを記す。

(5) 調査地・文書館建物などの写真

以下の写真は2008年3月6日､内モンゴル通遼市ヨリーンモド村で取ったものである。憑依している二人は師匠シャマンに弟子入りしたばかりの初心者であり、巫病治療であるシャマニズム的修行をおこなっている。インタビューで尋ねたところ、この二人の依頼者は三日間の憑依的修行をおこなったことによって、眩暈がしたり、痙攣したりすることが少なくなってきており、調子がかなり良くなってきたという。

【写真１】憑霊状態中のシャマンにお酒を捧げている様子

【写真２】憑依したシャマンが踊っている様子